

突厥・吐蕃・ウイグルが周辺諸国との間で 展開した婚姻外交と東部ユーラシアの国際情勢

菅 沼 愛 語

はじめに

歴史を見る一般的な視点として、「友好」や「敵対」など、国家間の関係性を測る「指標」は、戦争・同盟・婚姻関係など幾つか挙げられる。戦争は、非常に分かり易い敵対関係の指標であるが、平時の国家間の関係は、様々な要素が複雑に絡み合い、把握するのが難しい。例えば、一つの国家の中でも、隣国に友好的な勢力や、敵視する勢力など複数の勢力が一般には併存し、それら諸勢力の強弱なども、状況や時間とともに変化する。その点、国家レベルの婚姻関係や同盟関係は、（もちろん例外があるが）一般に、国家間の親密性を示す重要な指標であり、とりわけ平時での国家間の関係性を理解する上で有用である。また、婚姻関係からは、国家間の親密度はもちろん、国家内での（相手国に対する）「親和勢力」や「敵対勢力」などの相対的な優劣もある程度はわかる。つまり、敵対勢力が主流では、国家レベルの婚姻関係は成立し難いと考えられるからである。

本稿では、六世紀中葉から八世紀までの東部ユーラシアにおける、外交的側面を有する国家間（あるいは国家と属国）の婚姻関係、とりわけ、国家がその周辺諸国と婚姻政策を推し進めた事例に注目し、その外交形態を「婚姻

【図】 六世紀中葉～八世紀の東部ユーラシアの婚姻ネットワークの推移

※白矢印は婚姻関係の成立を示す（矢印の方向に娘が嫁いだ）。黒矢印は対立を示す。

※点線矢印は、公主降嫁を許可したが実現しなかった事を示す。

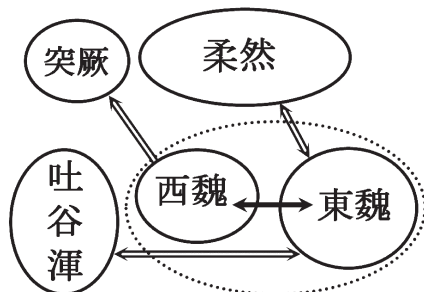


図 1：540年代～550年代の東部ユーラシア

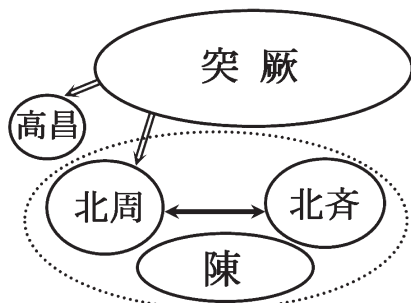


図 2：560年代の東部ユーラシア

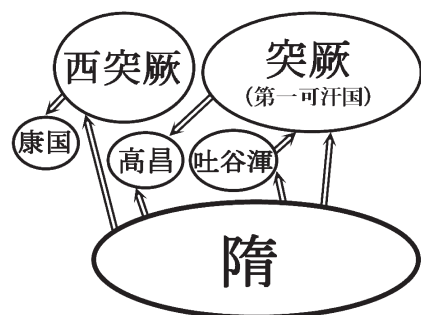


図 3：隋代の東部ユーラシア

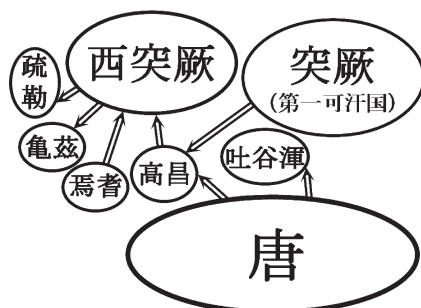


図 4：唐初の東部ユーラシア

※時期は不明だが于闐の王女が西突厥可汗の妃となる。やはり時期は不明だが突厥の王女がキルギスに降嫁。また突厥（第一可汗国）の可汗の娘が高昌に降嫁したのは東西分裂前。

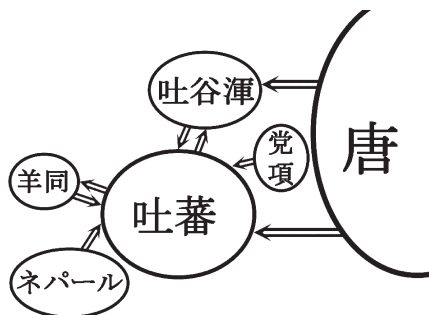


図5：7世紀、吐蕃と周辺諸国との婚姻

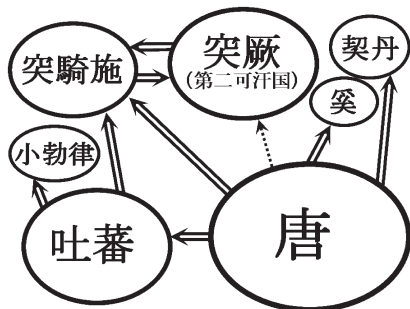


図6：8世紀前半の東部ユーラシア諸国の婚姻外交

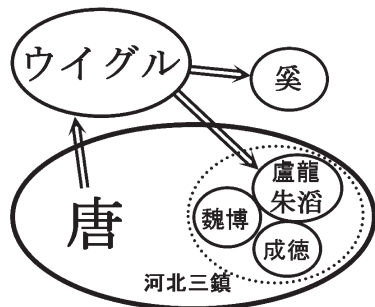


図7：安史の乱後、ウイグルを中心とした婚姻関係

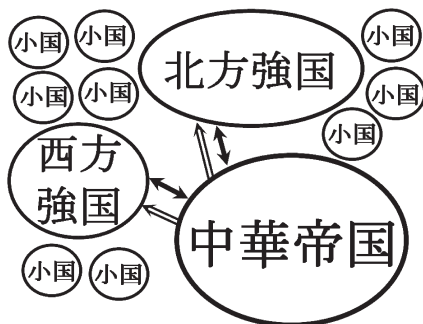


図8：7～8世紀の東部ユーラシアにおける勢力の構図

外交」と呼ぶことにする。そして、統一中華帝国である隋唐王朝の他に、当該時期の強国である、突厥（第一可汗国・五五二〜六三〇年、西突厥・五八三〜六五七年、第二可汗国・六八二〜七四四年）、吐蕃（七世紀初頭〜八四六年頃）、ウイグル（七四四〜八四〇年）に焦点を当て、これらが周辺諸国との間に展開した婚姻外交を、婚姻の状況・背景・傾向なども含めて精査することで、東部ユーラシアで形成された「婚姻ネットワーク」とその推移を明示し、国際情勢とも連動させながら俯瞰したいと思う。

なお、「六世紀中葉から八世紀の東部ユーラシア諸国の婚姻ネットワークの推移」を俯瞰したものが【図1】（図8）である。時期にもよるが、概ね、中華勢力と北方強国、時には西方強国が中心的な基軸となり、強国同士で、あるいは、各々の周辺小国と婚姻関係を結ぶなどして、巨大で動的な強相関システムを形成していた。

隋唐時代、中華王朝から和蕃公主が盛んに突厥・吐蕃・ウイグルなどの周辺諸国に降嫁し、とりわけ、唐における公主降嫁を通じた外交政策に対し、高い関心が寄せられ多くの研究がなされてきた^①。しかし、実は、この時期、周辺国同士の間でも通婚が盛んに行われている。とはいえ、それらに関する研究は隋唐の和蕃公主に比べると稀少であり、その全体像の把握・理解は、この分野の課題の一つとして残されている。

周辺国同士の通婚の例としては、『隋書』卷八三西域伝、『旧唐書』卷一九八西戎伝、『新唐書』卷二一七下回鶻伝下黠戛斯伝、『新唐書』卷二二西域伝などによれば、突厥が高昌（トルファン）・康国（サマルカンド）・疏勒（カシュガル）・堅昆（キルギス）などの周辺諸国と、吐蕃が吐谷渾・小勃律（ギルギット）などの近隣諸国と婚姻を結んでいる。

また、漢文史料には記載がないが、例えば、チベット語史料によれば、吐蕃の初代の贊普（Ⅱ王）ソンツェン・ガムポ（六世紀末〜六四九年、棄宗弄讚）には五人もの妃がおり、その出身は吐蕃・羊同（シャンシュン）・党項（タングート）・ネパール・唐であった^②。ソンツェン・ガムポについては、唐の文成公主が降嫁した事がよく知ら

【表1】突騎施の可汗・蘇祿の3人の可敦（妻）

国	名前（出自）	降嫁年代	典拠（先行研究）
唐	交河公主（阿史那懷道の娘）	開元10(722)	旧突厥，新突厥，通212
突厥	毗伽可汗の娘	開元22(734)以前	旧突厥，新突厥，毗伽可汗碑文北面9～10行目（小野川秀美1943：285～286）
吐蕃	ジェワロンマロエ （吐蕃王チデツクツェンの娘）	734年（犬の年、 開元22）	旧突厥，新突厥，敦煌編年記（佐藤長1977：470，736； 王堯1992：153；黃布凡2000：52；森安孝夫2015：174～175）

※略号：旧突厥＝『旧唐書』巻194下突厥伝下、新突厥＝『新唐書』巻215下突厥伝下、通＝『資治通鑑』。小野川秀美1943＝「突厥碑文訳註」（『滿蒙史論叢』第四巻、日滿文化協会、1943年）、佐藤長1977＝『古代チベット史研究』（同朋舎、1977年）、王堯1992＝王堯・陳踐訳注『敦煌本吐蕃歴史文書（増訂本）』（民族出版社、1992年）、黃布凡2000＝黃布凡・馬徳『敦煌藏文吐蕃史文獻訳註』（甘肅教育出版社、2000年）、森安孝夫2015＝「吐蕃の中央アジア進出」（『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、2015年）。

係や外交関係は、時間と共に動的に推移しており、それに伴って周辺小国の服属関係なども幾分流動的であり、とりわけ大国間の狭間に位置する小国は、同時期に両大国に臣従したり、大同士の戦争への参与を余儀なくされたりした。

もちろん、こういった大国間の狭間にある小国に対する綱引きは、隋唐期だけではなく、古くは漢代などでも見られる。例えば、かつて漢代では武帝の時代、匈奴の勢力圏にあった烏孫の昆弥（＝王）のもとに解憂公主が降嫁し、王子・元貴靡を生んだが、烏孫には匈奴からも女性が嫁ぎ、王子・烏就屠を儲けていたため、後継者争いが勃発した。その際、宣帝は現地の烏孫人が匈奴を支持している点にも配慮して、漢の血を引く王子・元貴靡を大昆弥、匈奴の血を引く王子・烏就屠を小昆弥となし、漢と匈奴の双方の血筋を立てる事で烏孫の内紛を收拾した⁽¹⁾。こうした漢代の烏孫への公主降嫁政策からも国際情勢の動向と絡めて、広い視点から理解する事も必要であろう。

本稿では、隋唐期における東部ユーラシアの強国で、隋および唐からも公主を娶っている突厥・吐蕃・ウイグルの三つの強国に焦点を当て、突厥・吐蕃・ウイグルとその周辺国家との通婚状況を、漢文史料だけでなく、突厥碑文やチベット語史料、及びそれに基づく先行研究からも、広く抽出・整理し、論考を加える。また、その際、中華帝国や北方・西方強国の周辺に位置する小国の立場や動向についても可能な限り見ていく。

隋唐時代の東部ユーラシア世界の典型的な周辺強国としては、隋代では突厥（第一可汗国）及び西突厥、唐代では、突厥（第一可汗国・第二可汗国）及び西突厥、吐蕃、ウイグルが挙げられるので、まず第一章で突厥および西突厥の周辺諸国との婚姻、第二章で吐蕃とその近隣諸国との婚姻、第三章で安史の乱後のウイグルと周辺国家との通婚を各々取り上げ、最後に第四章で、六世紀中葉から八世紀の東部ユーラシアの婚姻ネットワークの推移について総括したいと思う。

本稿では、『魏書』『周書』『北齊書』『北史』『隋書』『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』『冊府元龜』、それに『曲江集』収集の玄宗の勅書などの漢文史料に加え、突厥碑文、敦煌出土のチベット語編年記（P.t.1288, Old Tibetan Annals⁽⁹⁾）、『賢者喜宴（mkhas pavi dgav ston）』⁽¹⁾などにも基づき、六世紀中葉から八世紀の東部ユーラシア諸国の婚姻関係に関する記述を抽出し、図表にまとめた。引用した史料の「」内は筆者の翻訳であり、傍線は筆者が附した。

第一章 突厥（第一可汗国・第二可汗国）および西突厥と唐を含めた周辺諸国 （西域諸国・吐谷渾・キルギス・突騎施）との婚姻関係

本章では、突厥および西突厥の周辺諸国との婚姻を『隋書』『旧唐書』などの漢文史料や突厥碑文に依拠し、周辺諸国との婚姻の傾向を見ていく。なお、突厥（第一可汗国）は、西魏の廃帝元年（五五二）、柔然を滅ぼして自立し、モンゴル高原の覇者となったが、隋の開皇三年（五八三）、文帝の離間策により東西に分裂し、東突厥は貞観四年（六三〇）、西突厥は顕慶二年（六五七）に各々唐によって滅ぼされた。その後、東突厥は永淳元年（六八二）に再興し（第二可汗国）、天寶三載（七四四）、ウイグルに滅ぼされた。

本章では、突厥の婚姻外交を時期ごとに取り上げ、まとめたいと思う。西魏・東魏・北周と柔然・突厥・吐谷渾

との婚姻外交、突厥に降嫁した隋・唐の和蕃公主については各々前稿^⑧で取り上げ考察したので、それらに關しては要点だけを述べることにする。また、柔然・吐谷渾・突厥と華北の中華諸王朝（西魏・東魏・北周）との婚姻關係については【表2】、突厥に嫁いできた隋唐の公主もしくは周辺國家の王女については【表3】、突厥が王女を嫁がせた事例については【表4】に整理した。

（一）前史・柔然・吐谷渾・西魏・東魏の婚姻外交（五三〇年代～五四〇年代）

突厥が勃興した頃、モンゴル高原では柔然、青海では吐谷渾が各々勢力を有し、中華は南北朝時代の分裂期にあり、華北に東魏と西魏、南に梁の三国が鼎立していた。本節では、突厥の前史として、柔然・吐谷渾・西魏・東魏の婚姻外交を簡単に見ておく。詳細については【表2】と前稿^⑨も参照されたい。

華北の覇權を巡って鋭く対立する東魏と西魏は、互いに相手に打ち勝つため、北方の強國・柔然と通婚も介して連繫を試みた。まず、五三八年（大統四・大同四）、西魏の文帝が、柔然の可汗・阿那瓌の娘を娶って皇后（悼皇后）となし、柔然の塔寒（阿那瓌の兄弟）に化政公主（元翌の娘）を降嫁させ、柔然との間で二重の婚姻關係を結び、東魏に対抗した。

しかし、五四〇年代になると、東魏が柔然・吐谷渾・梁と連繫して西魏を包囲した。その際、東魏は、柔然の太子・菴羅辰（阿那瓌の息子）に蘭陵郡長公主（常山王の妹）を降嫁させただけでなく、実力者の高歡が、柔然の可汗・阿那瓌の娘・蠕蠕公主を娶り、高歡の息子・高湛も菴羅辰の娘・隣和公主を娶って、三重の婚姻關係を結び合っただけでなく、東魏は吐谷渾との連繫も図り、広業公主（濟南王匡の孫）を吐谷渾の可汗・夸呂に降嫁させると同時に、孝靜帝も夸呂の従妹を娶って、二重の婚姻關係を結んで固い友好關係を築いた（表2・図1・図2）。

これに対し、孤立した西魏は、東魏・柔然・吐谷渾・梁の構築した西魏包囲網に対抗するため、大統十七年（五

【表2】 柔然・吐谷渾・突厥と華北の中華諸王朝（西魏・東魏・北周）との婚姻関係

成婚年：西暦 (元号)	国	婚姻関係	典拠
538(大統4)	柔然と西魏	柔然の阿那瓌の娘(後の悼皇后)が、西魏の文帝に嫁ぐ	北13悼皇后伝、北98蠕蠕伝
538(大統4)	柔然と西魏	柔然の塔寒(阿那瓌の兄弟)が、西魏の化政公主(元翌の娘)を娶る	北98蠕蠕伝、通158大同4(538)年
541(興和3)	柔然と東魏	柔然の菴羅辰(阿那瓌の太子)が、東魏の蘭陵郡長公主(常山王の妹)を娶る	北98蠕蠕伝
542(興和4)	柔然と東魏	柔然の菴羅辰の娘・隣和公主が、東魏の高湛(高歡の子、後の北齊の武帝)に嫁ぐ	齊7武成帝紀、北98蠕蠕伝
545(武定3)	柔然と東魏	柔然の阿那瓌の娘・蠕蠕公主が、東魏の高歡に嫁ぐ	北14蠕蠕公主伝、通159大同11(545)年
545(武定3)	吐谷渾と東魏	吐谷渾の夸呂の従妹が、東魏の孝静帝に嫁ぐ	魏12孝静帝紀、魏101吐谷渾伝、通159大同11年
545(武定3)頃?	吐谷渾と東魏	吐谷渾の夸呂が、東魏の広楽公主(済南王匡の孫)を娶る	魏101吐谷渾伝
551(大統17)	突厥と西魏	突厥の土門(伊利可汗)が、西魏の長楽公主を娶る	周50突厥伝、通164大宝2(551)年
568(天和3)	突厥と北周	突厥の木杆可汗の娘(後の阿史那皇后)が、北周の武帝に嫁ぐ	周5武帝紀、周50突厥伝、通170光大2(568)年
580(大象2)	突厥と北周	突厥の摂図(後の第6代・沙鉢略可汗)が、北周の千金公主(後に隋文帝の養女・大義公主)を娶る	周50突厥伝、通173・174太建11~12(579~580)年

※略号：魏＝『魏書』、周＝『周書』、齊＝『北齊書』、北＝『北史』、通＝『資治通鑑』。

五一)、柔然に服属していた突厥と婚姻を結び、連繫した(後述)。次節では、こういった状況下で発生・展開した突厥の婚姻外交に焦点をあてる。

(二) 突厥の勃興と西魏・北周との婚姻外交

突厥は元来、柔然に服属していたが、族長の土門が鉄勒を討伐して勢いづき、柔然に通婚を請願した。しかし柔然が土門を侮辱したため、土門は怒り、大統十七年(五五一)、西魏に通婚を求めた。前述の如く、西魏はこの頃、東魏の構築した西魏包囲網に苦戦していたので、土門に長楽公主を降嫁させ(表2)、突厥と通好した。土門は翌年の廃帝元年(五五二)、柔然を攻撃し、伊利可汗を称して独立し、モンゴル高原に政権を樹立した。こうして北方遊牧政権が柔然から突厥に交代した前後、華北でも王朝交代が起こり、東魏は武定八年(五五〇)に北齊、西魏は五五七年に北周へと各々代替わりした。北齊も北周も、前王朝からの因縁を継承し、華北の覇権を巡り対立した。その際、北齊も北周も突厥に莫大な贈物を献上し、婚姻同盟の締結を請願した。これに対し、突厥の第三代・木杆可汗は、保定三年(五六三)く保定

【表3】突厥に嫁いできた隋唐の公主もしくは周辺国の王女

時期	降嫁先(可汗及び突厥有力者)	降嫁してきた公主、 或いは周辺国の娘	降嫁年代	典拠(先行研究)〔※備考〕
第一可汗国	土門・伊利可汗	西魏の長楽公主	大統17(551)	周書50突厥伝、通164大宝2(551)年
	摂図・沙鉢略可汗	北周の千金公主 (隋の文帝の養女・大義公主)	大象2(580)	隋書84突厥伝、通173・通174太建11～12(579～580)年
	都藍可汗		開皇8(588)頃	隋書84突厥伝
	染干・啓民可汗	吐谷渾の女性・婆施 (頡利可汗莫賀咄設の母)	義成公主降嫁以前	隋書84西突厥伝、旧突厥、新突厥
		隋の安義公主	開皇17(597)	隋書84突厥伝、通178開皇17年
			開皇19(599)	隋書84突厥伝、通178開皇19年
	始畢可汗	隋の義成公主	大業5(609)頃	隋書84突厥伝、通181大業5年
	処羅可汗		武德2(619)頃	旧突厥、新突厥、通187
	頡利可汗		武德3(620)頃	旧突厥、新突厥、通188
西突厥	泥師処羅可汗	隋の信義公主	大業10(614)正月	隋書4煬帝紀、隋書84西突厥伝
	西突厥可汗	于闐王・伏闐耶散罷羅摩の妹	不明	于闐国懸記(寺本婉雅1921:45)、〔※原文は「突厥可汗」とするが、于闐は西突厥に臣従していたので「西突厥の可汗」と推測〕
	咄度設(葉護可汗の長男)	高昌王・麴文泰の妹	不明	大唐大慈恩寺三藏法師伝2
	屈利啜(西突厥の重臣)の弟	焉耆王・突騎支の娘	貞觀14～18(640～644)頃?	旧198焉耆伝、新221焉耆伝、通197
第二可汗国	揚我支特勤(熱噉の子)	唐の南和県主(蜀王)の娘	開元元(713)	新突厥
	毗伽可汗の子	突騎施可汗・蘇祿の娘	開元22(734)以前	毗伽可汗碑文北面9～10行目(小野川秀美1943:285～286)

【表4】突厥が王女を周辺国に嫁がせた事例

時期	可汗の娘	降嫁先	降嫁年代	典拠〔※備考〕
第一可汗国	木杆可汗の娘・阿史那皇后	北周の武帝	天和3(568)	周書5武帝紀、周書50突厥伝
	突厥可汗(木杆可汗、もしくは木杆可汗時代の西面可汗〔室点蜜可汗〕)の娘	高昌王の麴寶茂	不明	隋書83高昌伝、大谷勝眞1936、嶋崎昌1977
		高昌王の麴乾固	不明	同上
		高昌王の麴伯雅	隋代	隋書83高昌伝
西突厥	達頭可汗の娘	康国王の代失畢	隋代	隋書83康国伝
	葉護可汗の娘	康国王の屈支支	隋の煬帝の時代	旧198康国伝、新221康国伝
おそらく西突厥	突厥可汗の娘(西突厥可汗の娘?)	疏勒王の阿摩支	貞觀年間(627～649)	旧198疏勒伝、新221疏勒伝。〔※時期と場所から西突厥時代と推測〕
	阿史那氏(西突厥可汗の娘?)	龜茲王の訶黎布失畢	顯慶3(658)以前	新211龜茲伝、通200顯慶3(658)正月条。〔※龜茲が西突厥に臣従していた事、「阿史那」が突厥の姓である事から、西突厥可汗の娘と推測〕
第二可汗国	毗伽可汗の娘	突騎施可汗の蘇祿	開元22(734)以前	旧突厥、新突厥、毗伽可汗碑文北面9～10行目、小野川秀美1943:285～286
不明	突厥の女(突厥可汗の娘?)	堅昆(キルギス)	不明	新217下回鶻伝下點焉斯伝

※略号：旧＝『旧唐書』、新＝『新唐書』、旧突厥＝『旧唐書』巻194突厥伝、新突厥＝『新唐書』巻215突厥伝、通＝『資治通鑑』、寺本婉雅1921＝『于闐国史』(丁子屋書店、1921年)、大谷勝眞1936＝『高昌麴氏王統考』(『京城帝国大学文学会論叢』第5輯、史学篇、1936年)、小野川秀美1943＝『突厥碑文訳註』(『満蒙史論叢』第四巻、日満文化協会、1943年)、嶋崎昌1977＝『隋唐時代の東トウルキスタン研究』(東京大学出版会、1977年)。

四年（五六四）、北周と連合して北斉を攻撃し、天和三年（五六八）、北周の武帝に娘（阿史那皇后）を嫁がせた（表2）。^①

このように、新興の突厥にとって、婚姻も通じた西魏との通好は国家興隆のための重要な契機の一つになったようである。その後も突厥は北斉と北周の対立も巧みに利用しつつ勢力を拡張し、モンゴル高原から中央アジアまでの広大な領域を支配した。突厥にとって、婚姻外交の展開は、勃興当初より、国力の充実と発展に利する対外政策であったと言えよう。突厥は、婚姻外交の重要性を、前代の柔然が東魏・西魏との間で繰り広げた婚姻政策から学んだのかも知れない。

（三）突厥（第一可汗国・第二可汗国）および西突厥への隋唐の和蕃公主の降嫁

隋代、突厥（第一可汗国・東突厥）に対しては安義公主と義成公主が、西突厥には信義公主が各々降嫁した。また、隋の文帝は、突厥の六代目の大可汗・沙鉢略可汗に嫁いでいた北周の千金公主を養女となし、大義公主に封じた。^②

隋は、突厥および西突厥に対し、公主降嫁も通じて和親し、北方および西方からの脅威の削減を試みたと考えられるが、時には、公主の降嫁と通婚の提案を利用して、突厥や西突厥の可汗同士を離間・対決させて、内紛を煽る事もあった。^③

唐代になると、突厥（第一可汗国・第二可汗国）にも西突厥にも、公主は降嫁しなかった。第二可汗国の第二代・默啜と第三代・毗伽可汗が各々唐に対し公主降嫁を請願し、唐も降嫁を検討したが、可汗の死去等により公主の降嫁は実現しなかった。ただ、開元元年（七一三）、默啜の息子・楊我支特勤に対し、南和県主（蜀王の娘）が降嫁した。また、唐は、西突厥の統葉護可汗、乙毗射匱可汗に対し、公主降嫁を検討したが、やはり可汗の死去等により降嫁は実現しなかった（表3）。^④

(四) 突厥第一可汗国および西突厥と周辺諸国(西域・吐谷渾・キルギスなど)との婚姻

突厥第一可汗国はモンゴル高原から中央アジアに至る広大な領土を、また、西突厥は西域や中央アジアを各々支配していた。このため、『隋書』巻八三西域伝、『旧唐書』巻一九八西戎伝、『新唐書』巻二二一西域伝などには、西突厥が西域諸国の王と婚姻を結ぶ事例が幾つか見られ、その点について岑仲勉氏や余太山氏などが指摘している。⁽¹⁶⁾

なお、『旧唐書』巻一九四下突厥伝下には「其西域諸国王悉授頡利発、并遣吐屯一人監統之、督其征賦」とあり、西突厥は、西域諸国の王に「頡利発 (jitabar、部族長)」の称号を授けると同時に、「吐屯 (tudun)」も派遣して西域諸国の監督と徴税を司らせ、支配下に組み入れていた。⁽¹⁷⁾ 婚姻政策も、西突厥による西域支配の一形態であると考えられる。

そこで本節では、第一可汗国および西突厥と周辺国家との婚姻状況をまとめ、その実情や意義について考察する。

(表4 参照)

(1) 高昌(トルファン)

『隋書』巻八三高昌伝には、「伯雅立。其大母本突厥可汗女、其父死、突厥令依其俗。…従。〔第八代の麴伯雅(在位六〇一〜六一九年)が即位した。伯雅の祖母は、元々は突厥可汗の娘であった。伯雅の父が亡くなると、突厥が伯雅に対し、突厥の婚姻習俗に従うよう命じた。…伯雅は突厥の習俗に従い、可汗の娘と再婚した。〕とある。即ち、第六代高昌王の麴寶茂⁽¹⁸⁾(伯雅の祖父。在位は五五五〜五六〇年)は突厥可汗の娘を娶っていた。この突厥可汗を、大谷勝真氏は第一可汗国第三代(東西分裂前)の木杆可汗、嶋崎昌氏は木杆可汗時代の西面可汗(ディザブロス〔室点蜜可汗〕)と見なす。⁽¹⁹⁾

麴寶茂の死後、この突厥可汗の娘は突厥のレヴィレート婚⁽²⁰⁾の習俗に従い、寶茂の息子麴乾固(在位五六一〜六〇一年)と再婚し、乾固の死後には寶茂の孫・伯雅が、(分裂後の)突厥の命令により、レヴィレート婚の風習に則

って（おそらくは義理の）祖母と再婚した。

隋が中華を再統一（五八九年）し、大業四年（六〇八）、煬帝が西方攻略を開始すると、麴伯雅は隋に入朝した。煬帝は大業八年（六一二）、華容公主を伯雅に降嫁させた。伯雅が唐の武徳二年（六一九）に亡くなると、息子の文泰が高昌王となり、レヴィート婚の習俗に則り華容公主と再婚した。文泰は貞観四年（六三〇）に唐に入朝し、華容公主が唐の李姓を賜り、常樂公主に改封された⁽²¹⁾。

このように高昌は隋唐に恭順の意を示したが、西突厥と中華（隋唐）の二大勢力圏の狭間に位置するため、西突厥との親善関係も維持し、麴文泰の妹が、葉護可汗の長男咀度設の妻となった⁽²²⁾。

（2）康国（サマルカンド）

『隋書』卷八三康国伝には「王字代失畢：其妻突厥達度可汗女也」とあり、康国王・代失畢の妻は、西突厥の達頭可汗（在位は五七六～六〇三年）の娘であった。また、『旧唐書』卷一九八康国伝には「隋煬帝時、其王屈木支娶西突厥葉護可汗女、遂臣於西突厥」とあり、煬帝時代の康国王・屈木支は西突厥の葉護可汗の娘を娶り、西突厥に臣従していた。

（3）疏勒（カシュガル）

『旧唐書』卷一九八疏勒伝には「貞観中、突厥以女妻王」、『新唐書』卷二二一疏勒伝には「王姓裴氏、自号阿摩支：突厥以女妻之」とあり、唐の貞観年間中（六二七～六四九年）、疏勒の王・裴阿摩支は突厥可汗の娘を妻としていた。時期と場所より推測して、この突厥の可汗は西突厥の可汗と思われる。

（4）焉耆（カラシャール）

『旧唐書』卷一九八焉耆伝には「王姓龍氏、名突騎支：常役属於西突厥。：貞観六年、突騎支遣使貢：十四、侯君集討高昌。：其年、西突厥重臣屈利啜為其弟娶焉耆王女、由是相為唇齒、朝貢遂闕。安西都護郭孝恪請擊之、太

宗許。」とある。つまり、焉耆の王・龍突騎支は元來、西突厥に従属していたが、貞觀六年（六三二）、唐に朝貢した。しかし、貞觀十四年（六四〇）、高昌が唐に滅ぼされると、突騎支は唐の勢力を恐れ、王女を西突厥の重臣・屈利啜の弟に嫁がせ、西突厥の庇護下に入った。焉耆が西突厥と通好し朝貢しなくなったので、太宗は安西都護の郭孝恪に焉耆を滅ぼさせた（貞觀十八年＝六四四）。

（5）龜茲（クチャ）

『新唐書』卷二二一龜茲伝に「臣西突厥：訶黎布失畢為龜茲王：其妻阿史那」、『資治通鑑』卷二〇〇・顯慶三年（六五八）正月条に「龜茲王布失華妻阿史那氏」とあり、龜茲王の訶黎布失畢は阿史那氏を妻としていた。龜茲が西突厥に臣従していた事、阿史那が突厥の姓である事から、龜茲王の妻「阿史那氏」は西突厥可汗の娘であつたと思われる。

（6）于闐（ホータン）

チベット語の『于闐国懸記』によれば、于闐王・伏闐耶散瞿羅摩の妹が突厥可汗の妃であつたという。²⁴『旧唐書』卷一九八于闐伝には「臣于西突厥」とあり、于闐は西突厥に臣従していた。ゆえに、于闐王の妹は西突厥可汗の妃であつたと考えられる。

（7）吐谷渾

『隋書』卷八四西突厥伝には「吐谷渾者、啓民少子莫賀咄設之母家也。今天子又以義成公主妻於啓民。啓民畏天子之威而與之絶。（吐谷渾は、突厥第一可汗国の第十一代・啓民可汗（在位五八七～六〇九年）の末息子・莫賀咄設（後の第十四代可汗・頡利可汗）の母の実家であつた。しかし、いま、隋の煬帝が義成公主を啓民可汗に降嫁させると、啓民可汗は煬帝の威光を恐れ、吐谷渾との通好を絶つた。）」とある。つまり、突厥と吐谷渾は通婚していたが、啓民可汗は義成公主を娶ると隋に憚り吐谷渾との通好をやめており、中華からの公主降嫁に、周辺国同士の

連繫阻止という外交的な効力もあつた事が分かる。⁽²⁵⁾

(8) 堅昆・黠戛斯(キルギス)

『新唐書』巻二一七下回鶻伝下黠戛斯伝には「堅昆…突厥以女妻其酋豪(キルギス…突厥は娘をキルギスの族長に嫁がせた)」とあり、キルギスの族長の妻は突厥可汗の娘であつた。ただ、時期は不明である。また、同じ『新唐書』黠戛斯伝に「回鶻稍衰、阿熱即自称可汗。其母、突騎施女也、為母可敦。妻葛禄葉護女、為可敦(ウイグルが衰退すると、キルギスの阿熱は可汗を自称した。阿熱の母親は突騎施の女性で、母可敦と言ひ、阿熱の妻は葛禄(羅) 禄の葉護の娘で、可敦となつた。)」とあり、ウイグルの衰退した八四〇年代、キルギス・突騎施・葛禄(カルルク)のトルコ系諸族の間で通婚していた事が分かる。

(9) まとめ(突厥および西突厥と周辺諸国との間の婚姻関係)

突厥および西突厥は、従属下の西域諸国やキルギスなどに対し王女を降嫁させて支配力を強化し、高昌・焉耆・于闐は王女を西突厥の可汗や有力者(可汗の息子、重臣の弟)に嫁がせて西突厥との親善を強化した。なお、西突厥は西域諸国に対し、監督官(吐屯)を派遣して貢物の献上を強要すると同時に、西域諸王と婚姻を結び、親善関係を築いていた。

唐代に入ると高昌や焉耆は唐の勢力拡大を懸念し、西突厥と通婚なども介して連繫し、唐に對抗した。しかし、唐は、貞観十四年(六四〇)に高昌、貞観十八年(六四四)に焉耆、貞観二十二年(六四八)に龜茲、顕慶二年(六五七)に西突厥を各々滅ぼし、高昌(後に龜茲)に安西都護府、焉耆・龜茲・于闐・疏勒に安西四鎮を設置した。西突厥と通婚していた高昌・焉耆・龜茲・于闐・疏勒が、いずれも唐の西域支配のための軍事拠点と化している点から、逆に、西突厥が西域にある軍事上・経済上の重要拠点に対し、婚姻政策も含めた支配体制を定着させようとしていた事が推測できる。

(五) 突厥第二可汗国の毗伽可汗と突騎施の蘇祿との二重の婚姻関係

突厥(第一可汗国)は、貞觀四年(六三〇)、唐によって滅ぼされたが、永淳元年(六八二)、再興した(第二可汗国)。その第三代・毗伽可汗は、西方の突騎施の可汗・蘇祿に娘を嫁がせている。突厥から突騎施への降嫁の時期の詳細は不明であるが、『旧唐書』突厥伝下によれば、両国は開元十八年(七三〇)、長安で席次争いをしている事から、それ以降と考えられる。

突騎施は西突厥を構成する十部族の一つで、蘇祿はその族長であり、西突厥の諸部族を糾合して勢力を拡張した。開元四年(七一六)、突厥で第二代の默啜が暗殺されると、蘇祿は自立して可汗を自称し、開元五年(七一二)、吐蕃と連合して唐の安西(撥換城)を攻撃した。この挙に對し、玄宗は開元七年(七一九)、蘇祿を「忠順可汗」に冊立し、開元十年(七二二)、交河公主(西突厥可汗の末裔・阿史那懷道の娘)を降嫁させ、懷柔を図った。蘇祿は、七二〇年〜七三六年、西方でも大食(アラブ)との間で中央アジア(ソグディアナ・ホラサンなど)の支配權を巡って對戦した。開元十五年(七二七)にも吐蕃と共に唐の安西城を襲撃した⁽²⁶⁾。このように東の唐、西の大食と各々對戦し、東西二正面作戰を展開する上でも、蘇祿にとって突厥との和親や連繫は重要であり、親善強化のためにも毗伽可汗の娘を娶ったと思われる。

一方、毗伽可汗は、例えば、開元二十年〜開元二十一年(七三二〜七三三)、契丹・奚・渤海と連合して唐と對立・對戦しており、地域的な覇權の確立や對唐を目的とする連繫強化のために、突騎施の蘇祿との間で婚姻同盟を締結したのかも知れない。

毗伽可汗と蘇祿との通婚については、「はじめに」でも指摘したように、突厥側の史料である毗伽可汗碑文の北面九〜十行目にも見え、そこには、「私は突騎施可汗にわが娘を…大いなる儀禮をもって送り与えた。私は突騎施可汗の娘を大いなる儀禮をもって、わが息子に取り与えた⁽²⁶⁾」と記されている。即ち、突厥碑文によれば、毗伽可汗

と蘇祿との間では、毗伽可汗の娘が蘇祿に嫁いでいただけでなく、毗伽可汗の息子にも蘇祿の娘が嫁いでいた事が分かる（系図・表3）。毗伽可汗の息子と蘇祿の娘との結婚は、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』などの漢文史料には見えない情報であり、注目に値する。通婚の時期は記されていないが、毗伽可汗が暗殺されるのが開元二十二年（七三四）であるので、それ以前の事である。

このように、突厥の毗伽可汗と突騎施の蘇祿は、二重の婚姻関係によって深く結ぼうとしたが、その背景には、対唐など対外戦略的な共通因子があったと考えられる。

第二章 吐蕃と周辺諸国との婚姻関係

七世紀初頭の吐蕃王ソンツェン・ガムポには五人もの妃がおり、そのうち四人が周辺諸国（羊同・党項・ネパール・唐）から嫁いできた。このように吐蕃王は周辺国から妃を迎え、各国と友好関係を築いていたが、それだけでなく、吐蕃の側からも王女を周辺国（羊同・吐谷渾・突騎施・小勃律）に嫁がせてもいた。

吐蕃と周辺国家との婚姻について、例えば、佐藤長氏は漢文史料とチベット語史料に基づき、唐も含めた周辺国家と吐蕃との婚姻の事例が多い事を指摘している。²⁹ 林冠群氏は漢文史料とチベット語史料を精査し、第五代のチデツクツェンより以前の吐蕃王は、周辺国から妃を迎え、周辺国にも王女を降嫁させたが、それ以降の王は吐蕃国内より妃を迎え、周辺諸国にも王女を降嫁させなかった事などを考察した。³⁰ 佐藤氏、林氏の優れた研究成果も取り入れつつ、本章では、国家別に吐蕃と近隣諸国の間に結ばれた婚姻関係を整理し、その傾向や背景などを見ておきたいと思う。吐蕃に嫁いできた周辺国の妃は【表5】、吐蕃王女の周辺国への降嫁については【表6】に整理したので、併せて参照されたい。

【表5】吐蕃に嫁いできた外国の妃

王（在位）	妃と出身地	成婚年代	典拠・漢文史料	典拠・チベット語史料	先行研究
ソンツェン・ガムボ(6世紀末～649年)	羊同の王女	不明	—	賢者喜宴	林冠群2007：211～217, 239；黄顯2010
	党項の王女	不明	—	賢者喜宴	林冠群2007：211, 239；黄顯2010：63
	ネパールの王女チツン	文成公主降嫁以前	—	賢者喜宴	佐藤長1977：55, 271, 735；林冠群2007：239；黄顯2010：54～58
	唐の文成公主	貞観15(641)	旧196吐蕃伝, 新216吐蕃伝, 通196	賢者喜宴	山口瑞鳳1983；佐藤長1977；黄顯2010：58～63
グンソン(638?～643年)	吐谷渾の王女(マンソン・マンツェンの母)	貞観12～16(638～642)頃	—	王統記(P.t.1286)、王統鏡	佐藤長1977：815注14；林冠群2007：219；旗手瞳2014：61注45
チデツクツェン(704～754年)	唐の金城公主	景龍4(710)	旧196吐蕃伝, 新216吐蕃伝, 通209	賢者喜宴、敦煌編年記	佐藤長1977；王堯1992：150, 153；黄布凡2000：47；黄顯2010

【表6】吐蕃王女の周辺国への降嫁

吐蕃王	嫁ぎ先	吐蕃王女	降嫁年	漢文史料	チベット語史料	先行研究
ソンツェン・ガムボ	羊同の王リグニリヤ	王女セマガル	不明	—	吐蕃王伝記(P.t.1287)	佐藤長1977：245～246；王堯1992：167～169；黄布凡2000：230～234；林冠群2007：215～217
チドゥーソン	吐谷渾王	王女チワン	689年(牛の年, 永昌元)	—	敦煌編年記	佐藤長1977：735, 815注15；王堯1992：148；黄布凡2000：43；旗手瞳2014：44
チデツクツェン	突騎施の可汗・蘇祿	王女ジェワロンマロエ	734年(犬の年, 開元22)	旧突厥, 新突厥	敦煌編年記	佐藤長1977：470, 736；王堯1992：153；黄布凡2000：52；林冠群2007：231～233；森安孝夫2015：174～175
	小勃律の王蘇失利之	王女	740年(龍の年, 開元28)	旧104高仙芝伝, 新135高仙芝伝, 新221小勃律伝	敦煌編年記	佐藤長1977：567注9；王堯1992：153；黄布凡2000：53；林冠群2007：233～234；森安孝夫2015：177

※略号：旧＝『旧唐書』、新＝『新唐書』、旧突厥＝『旧唐書』巻194突厥伝、新突厥＝『新唐書』巻215突厥伝、通＝『資治通鑑』、山口瑞鳳1983＝『吐蕃王国成立史研究』（岩波書店、1983年）、佐藤長1977＝『古代チベット史研究』（同朋舎、1977年）、王堯1992＝王堯・陳踐訳注『敦煌本吐蕃歴史文書（増訂本）』（民族出版社、1992年）、黄布凡2000＝黄布凡・馬徳『敦煌藏文吐蕃史文献訳注』（甘肅教育出版社、2000年）、林冠群2007＝『唐代吐蕃對外聯姻之研究』（『唐代吐蕃歴史と文化論集』中国蔵学出版社、2007年）、黄顯2010＝黄顯・周潤年訳注『賢者喜宴—吐蕃史訳注』（中央民族大学出版社、2010年）、旗手瞳2014＝『吐蕃による吐谷渾支配とガル氏』（『史学雑誌』123編1号、2014年）、森安孝夫2015＝『吐蕃の中央アジア進出』（『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会、2015年）。

(一) 唐との婚姻（文成公主と金城公主の降嫁）

貞観十五年（六四一）に文成公主〔調露二年（六八〇）没〕、景龍四年（七一〇）に金城公主〔雍王守礼の娘、開元二十七年（七三九）没〕が各々吐蕃に降嫁した。⁽⁴¹⁾とりわけ、金城公主は唐・吐蕃間の和戦に深く関わった。これについては前稿で論じたので、要点を記したい。金城公主の降嫁後、吐蕃が鄯州都督の楊矩に賄賂を贈り、河西九曲を化粧料として獲得し、そこを拠点として開元二年（七一四）、臨洮・蘭州（以上甘肅省）などを攻撃したので、唐・吐蕃間で戦闘が再開した。ただ公主は和睦交渉にも携わり、開元二十一年（七三三）、玄宗に対し、国境を赤嶺（青海東）で劃定し境界碑を立てるよう請願したので、両国は国境を劃定して境界碑（赤嶺碑文）を立て、碑石の上に会盟（開元会盟）の盟文を刻んだ。つまり、金城公主が唐・吐蕃間の戦争再開の契機にもなったが、公主が両国の和平を取り持つ一面もあった。

(二) 羊同（シャンシュン）との婚姻

羊同は、西チベットに位置し、六四三年頃、吐蕃王ソンツェン・ガムポに滅ぼされた。ソンツェンは当初、前述のように羊同から妃を迎えていたが、羊同王リグニリヤに対しても妹のセマガルを嫁がせ、吐蕃と羊同は二重の婚姻で固く結ばれていた。⁽⁴³⁾

なお、チベット語史料である敦煌出土の吐蕃王伝記（P.1287）には、羊同王リグニリヤが他の女性を寵愛して吐蕃王女セマガルを冷遇した事、妹を粗略に扱われたソンツェンが怒り、羊同を攻め滅ぼした事、などが記されている。⁽⁴⁴⁾

(三) 党項（タンゲート）との婚姻

ソンツェン・ガムポは、『賢者喜宴』によれば党項からも妃を迎えていた。⁽⁴⁵⁾吐蕃と党項諸族との通婚の事例は八世紀後半にも見られ、『新唐書』巻二二一党項伝は大暦年間（七六六―七七九年）頃の党項の状況を「慶州有破丑

氏族三、野利氏族五、把利氏族一、與吐蕃姻援、贊普悉王之」と記している。吐蕃は慶州（内モン族自治区）にいた党項の破丑氏族・野利氏族・把利氏族と各々婚姻を結んで支援し、これらの諸族長を王となしていた。

（四）ネパールとの婚姻

ソンツェン・ガムポは、『賢者喜宴』などによれば、ネパールからチツンを妃として迎えた。⁽³⁶⁾チツンは仏教の普及にも尽力し、ラサにトウルナン寺（ジョカン寺、大昭寺）を建立した。⁽³⁷⁾

（五）吐谷渾との婚姻

チベット語の『王統記（P.1286）』や『王統鏡』などによれば、吐谷渾の王女が第二代の吐蕃王グンソン・グンツェン（在位六三八〜六四三年）に嫁ぎ、第三代の吐蕃王マンソン・マンツェン（在位六四九〜六七六年）を生んだという。⁽³⁸⁾

吐谷渾は東西交易路を扼する青海にあるため、軍事上・経済上の重要拠点であり、吐蕃だけでなく、唐も同地の掌握を試みていた。唐は、親唐の吐谷渾の王子・慕容諾曷鉢を擁立し、貞観十四年（六四〇）、弘化公主を降嫁させ、諾曷鉢の長男に金城郡主、次男に金明郡主も各々降嫁させて、三重の婚姻により吐谷渾との連繫を強化した。

しかし、六五〇年代〜六六〇年代、唐は百濟・高句麗との戦いに兵力を集中していた事もあり、吐蕃軍による吐谷渾への侵攻を阻止する事ができず、龍朔三年（六六三）、吐谷渾は吐蕃に併呑され、慕容諾曷鉢と弘化公主は涼州（甘肅省）に逃亡した。⁽³⁹⁾

吐蕃は吐谷渾を滅ぼした後、吐谷渾に王を擁立し、⁽⁴⁰⁾六八九年（永昌元）、王女のチワンを吐谷渾王に嫁がせた。⁽⁴¹⁾実は、吐蕃は、更に後年の七三七年（開元二十五）、小勃律を攻撃し、七四〇年（開元二十八）には、王女を嫁がせて小勃律への支配を強化しており（後述）、周辺諸国を軍事占領した後、王女を降嫁させる事が、吐蕃にとって占領統治の一形態であったと推測される。そこで本節では、吐谷渾を征服した後の吐蕃の婚姻政策についてもふれ

ておく。

チベット語の編年記によれば、六八九年（牛の年、永昌元年）、吐蕃の王女チワンが吐谷渾王に嫁ぎ、その後、吐谷渾王との間にマガトゴン可汗を儲けた。⁽⁴²⁾

ここで、王女が嫁いだ六八九年頃の吐蕃を巡る国際情勢を見ておく。吐蕃は七世紀後半、唐との間で西域の覇権を巡って攻防戦を繰り返し、垂拱三年（六八七）、焉耆・龜茲を陥落させ、安西四鎮を奪取した。⁽⁴³⁾ 吐蕃は、積極的な対外拡張策を推進するため、六八九年、王女を吐谷渾王に嫁がせたと考えられる。実際、唐が安西四鎮を奪還するため、永昌元年（六八九）、討伐軍を派遣したが、この唐軍は寅識迦河の戦いで吐蕃軍に大敗した。⁽⁴⁴⁾

なお、吐蕃による吐谷渾支配に関しては、旗手瞳氏の優れた論考があるので、ここで旗手氏の説を紹介したいと思う。旗手氏は、第四代の吐蕃王チ・ドゥーソンが、六九八年、それまで吐谷渾を支配していた宰相ガル一族を粛清したので、吐谷渾人の離反が相次いだ事、吐蕃が王女チワンに対し、吐蕃政府と吐谷渾宮廷をつなぐパイプ役となることを期待した事、吐蕃の有力氏族チヨクロ氏の娘がマガトゴン可汗に嫁ぎ、吐谷渾との信頼関係の回復に務めた事などを推察している。⁽⁴⁵⁾

（六）突騎施との婚姻

第五代の吐蕃王チデツクツェンは、突騎施可汗の蘇祿に王女を嫁がせた。チベット語の編年記には、吐蕃と蘇祿が婚姻を結んだ時期や降嫁した吐蕃王女の名も記されており、七三四年（犬の年、開元二十二年）、吐蕃の王女ジエワロンマロエが突騎施の蘇祿に嫁いだ。⁽⁴⁶⁾

吐蕃と突騎施の蘇祿は、それまでも反唐で連合し、開元五年（七一七）に安西（撥換城）、開元十五年（七二七）に安西城を各々攻撃しており、⁽⁴⁷⁾ 開元二十二年（七三四）の通婚により、対唐のための軍事同盟が強化されたと考えられる。

實際、突騎施の蘇祿は、吐蕃と通婚した翌年の開元二十三年（七三五）十月、唐の北庭と安西を攻撃した。なお、蘇祿はこの頃、大食との間でも中央アジア（ソグディアナ・ホラサン）の覇権を巡り、長期に亘って対戦している。つまり蘇祿は、東の唐、西の大食と対戦していたので、婚姻も通じた吐蕃との和睦は、二正面作戦を展開するための重要な布石であったと思われる。だが、東西二正面作戦は大きな負担であり、開元二十四年（七三六）正月、蘇祿は北庭都護の蓋嘉運に敗北し、同年十二月、大食との戦いにも大敗した。⁽⁴⁸⁾

一方、吐蕃は七三七年（牛の年、開元二十五）、小勃律に進撃し、七四〇年（龍の年、開元二十八年）には小勃律に王女を降嫁させて同地を勢力下に置いた（後述）。開元二十三―二十四年、突騎施が安西・北庭を攻撃して唐軍を牽制したので、これを好機と捉え、吐蕃が小勃律を攻撃したとの見解⁽⁴⁹⁾もあり、吐蕃にとっては、突騎施との婚姻同盟が有効に作用したように思われる。

吐蕃と突騎施の連合を唐がどのように受けとめたかについては、玄宗が吐蕃王チデツクツェンに授けた勅書から推察できる。例えば、開元二十四年（七三六）正月発布の「勅吐蕃贊普書（第三首）」には、「若與突騎施相合、謀我磧西、未必有成。〔突騎施と連合して唐の磧西を攻撃しても、きつと成功しないだろう。〕」、開元二十四年（七三六）九月発布の「勅吐蕃贊普書（第六首）」には、「突騎施、最爾醜虜：贊普越界與其婚姻。：贊普背朕宿恩、共彼相厚、応非長策、可熟思之。〔突騎施は取るに足らない蛮夷である。：吐蕃王は境界を越え突騎施と通婚した。：吐蕃王は朕が長年授けてきた恩義に背き、突騎施と誼を深めたが、これは吐蕃にとって長計にはならぬ。それをよく考えるべきだ。〕」とある。⁽⁵⁰⁾唐が、吐蕃・突騎施間の連合を警戒した事、吐蕃に対し、突騎施と連合して磧西（西域）を攻撃しないよう警告した事、吐蕃と突騎施の通婚を非難した事などが分かる。吐蕃と突騎施の婚姻も通じた連繫は、唐を牽制する軍事上・外交上の効力を発揮した事が見て取れよう。

(七) 小勃律(ギルギット)との婚姻

吐蕃は、開元二十八年(七四〇)、北西の小勃律に王女を降嫁させた(系図)。小勃律は「唐の西門」と称され、同地が吐蕃に制圧された場合、西域諸国も吐蕃の手に落ちると言われるほど、唐・吐蕃双方にとって重要な軍事上・経済上の要地であった。

『新唐書』卷二二・小勃律伝、卷二一・六吐蕃伝などによれば、開元十年(七二二)、吐蕃は小勃律に対し、「道を借りて安西四鎮を攻撃したい」と言い、同地に進出した。そのため小勃律王は唐の北庭節度使に助力を乞い、唐軍が吐蕃軍を撃退した。玄宗は小勃律王の没諱忙を冊立し、小勃律を綏遠軍となして掌握を図った。だが、蘇失利之が即位すると吐蕃が王女を降嫁させたので、小勃律の首領五、六人が吐蕃の腹心となり、吐蕃の勢力圏に入った。このため西北の二十餘国はみな吐蕃の支配下に入り、唐に貢獻しなくなった。

吐蕃が小勃律に王女を降嫁させた時期については漢文史料に記載がないが、チベット語編年記によれば、王女降嫁の時期は七四〇年(龍の年、開元二十八年)であった。⁽⁵⁾

なお、吐蕃による小勃律の軍事占領と唐の反撃については、『旧唐書』卷一九六吐蕃伝、『旧唐書』卷一〇四高仙芝伝、『資治通鑑』卷二二・四、卷二一・五、『冊府元龜』卷三五八・將帥部立功十一・高仙芝などに以下のように記されている。開元二十五(七三七)、吐蕃が小勃律を攻撃したので、小勃律は唐に急を告げた。玄宗は安西都護に三度も討伐させて小勃律の奪還を試みたが、戦果は挙げられなかった。天寶六載(七四七)、安西副都護の高仙芝が奇襲により小勃律に攻め入り、吐蕃派の大臣を殺し、蘇失利之と妻の吐蕃王女を捕虜となして、ようやく小勃律を吐蕃から奪還した。

このように、小勃律は吐蕃・唐双方にとって重要な係争地であった。それもあって、吐蕃は軍事占領した小勃律に対して王女を降嫁させ、吐蕃派の大臣も据えて同地を管轄下に置いた。小勃律の事例は、吐谷渾の場合とも類似

し、吐蕃は占領した要地に対し、王女を降嫁させ、支配の強化に尽力したと思われる。

（八）まとめ―吐蕃と近隣諸国との婚姻

吐蕃は近隣諸国に対し、積極的に婚姻外交を展開した。ただし、吐蕃の場合、唐以外の周辺国家との婚姻には、親善というより、支配強化という面が強く、例えば、羊同のように、降嫁した吐蕃王女が軽んじられると、滅ぼす口実になった。吐蕃は軍事占領した周辺国に対しても婚姻政策を用い、占領地の支配の円滑化を図っている。吐蕃にとつて、西域に出るための青海經由の要衝が吐谷渾、パミール經由で西域に出る際の要地が小勃律であつた。この二国は交通の要衝であるため、唐との間で争奪の的となつた。そこで、吐蕃は占領後の吐谷渾と小勃律に各々王女を降嫁させ、王女も重要な仲介者となして吐蕃による現地支配を維持・強化したと考えられる。

第三章 ウイグルと周辺諸国との婚姻関係およびその推移

ウイグルは安史の乱（七五五―七六三年）の時、唐に援軍を派遣し、国難を救う大功を挙げたため、長期中華王朝としては初の真公主（皇帝の実の娘）がウイグルに降嫁した。援軍の派遣や真公主の降嫁などにより、ウイグルは親唐であるというイメージが強いが、実はウイグルは時期によつて反唐となり、盧龍節度使の朱滔と婚姻を結び、朱滔が反乱を起こした際には援軍を派遣し、朱滔と共に河北を襲撃した事もあつた。⁵³ 北方遊牧政権が統一中華内の勢力と通婚し、援軍も派遣するのは稀有な事例であり、注目に値する。また、ウイグルは奚にも王女を降嫁させているが、これについてはあまり知られていない。

そこで、本章ではウイグルが唐以外の国家や勢力との間で結んだ婚姻にも着目し、『旧唐書』卷一九五迴紇伝、『新唐書』卷二一七回鶻伝、『資治通鑑』などに基づきつつ、通婚の背景や婚姻関係の推移などを見る。唐からウイグルへの公主降嫁については前稿⁵⁴で取り上げたので、それについては（一）と（四）で要点のみを記す。ウイグ

【表 7】ウイグルに降嫁した唐の公主達

公主の名(出自)	降嫁先	降嫁年代	備考	典拠
寧国公主(肅宗娘)	葛勒可汗	乾元元(758)	葛勒可汗の死去後、唐に帰国	旧廻紇, 新回鶻, 通220
小寧国公主(肅宗兄の 榮王琬の娘)	葛勒可汗・ 牟羽可汗	乾元元(758)	寧国公主の媵。可汗の息子を 2人生む	旧廻紇, 新回鶻
光親可敦(僕固懷恩娘)	牟羽可汗 (移地健)	乾元元(758)頃	宝応元(762)代宗が婆墨光親 麗華毗伽可敦に冊立	旧廻紇, 新回鶻
崇徽公主(僕固懷恩娘・ 代宗養女)	牟羽可汗	大暦4(769)	牟羽可汗の要請に応じて降嫁	旧廻紇, 新回鶻, 通224
咸安公主(德宗娘)	天親可汗	貞元4(788)	天親可汗の死後、後継の可汗 達と代々再婚。元和3(808)ウ イグルの使者が入朝し、咸安 公主の死去を報告	旧廻紇, 新回鶻, 通233
	忠貞可汗	貞元5(789)頃		
	奉誠可汗	貞元6(790)頃		
	懷信可汗	貞元11(795)頃		
太和公主(憲宗娘・ 穆宗妹)	崇徳可汗	長慶元(821)	崇徳可汗の死後、後継の可汗 達と代々再婚。会昌3(843)長 安に帰還	旧廻紇, 新回鶻, 通241
	昭礼可汗	長慶4(824)頃		
	彰信可汗	大和6(832)頃		

【表 8】ウイグル王女の降嫁

ウイグル王女 (出自)	降嫁先	降嫁年代	備考	典拠
毗伽公主 (葛勒可汗の可敦 〔妻〕の妹)	燉煌王承栄 (邠王守礼の息子)	至徳元(756)	肅宗から毗伽公主の称号を 賜る	旧廻紇, 新回鶻, 通219
ウイグル可汗の娘	奚の王	大暦末(779)以前	奚王の死後、朱滔によって 妻として迎えられる	新212朱滔伝
	朱滔(盧龍節度使)	大暦末(779)頃		新212朱滔伝, 通228

※略号：新＝『新唐書』、旧廻紇＝『旧唐書』巻195廻紇伝、新回鶻＝『新唐書』巻217回鶻伝、通＝『資治通鑑』

ルに降嫁した唐の公主については【表 7】、ウイグル王女の降嫁については【表 8】に各々まとめた。

(一) 安史の乱の時の唐とウイグルとの婚姻関係
(七五〇年代～七六〇年代)

安史の乱が勃発した翌年の至徳元載(七五六)、肅宗が燉煌王承栄(邠王守礼の息子)と僕固懷恩をウイグルに派遣し、援軍を請願すると、ウイグルの第二代・葛勒可汗(在位七四七～七五九年)は王女を承栄に嫁がせた。これに対し、肅宗は可汗の好意と援軍を確保するため、ウイグル王女に毗伽公主の称号を授け、王妃に冊立した(表 8)。

その後、ウイグルの援軍が唐軍と共に長安と洛陽を奪還したので、乾元元年(七五八)、肅宗は娘の寧国公主を葛勒可汗に降嫁させ、ウイグルの殊勲に応えた。肅宗は、寧国公主の降嫁時、榮王琬(肅宗の兄)の娘(小寧国公主)を媵として同行させた。また、葛勒可汗が末息子・移地健(後の牟羽可汗)に妻を賜りたいと請願したので、肅宗は僕固懷恩の娘・光親可敦を移地健に嫁がせ、ウイグルとの連繫

を更に強化した（表7）。

代宗も大暦四年（七六九）、第三代・牟羽可汗（在位七五九～七七九年）が公主降嫁を要請するとこれを許可し、崇徽公主（僕固懷恩の娘）を可汗に降嫁させた。この頃、吐蕃が頻繁に西北辺を襲撃したので、唐にはウイグルとの親善維持が必要であったと思われる。

（二）ウイグル王女の奚への降嫁（大暦末〔七七九年頃〕以前）

（1）七世紀～八世紀前半の奚（唐・突厥の二大強国の狭間にて）

奚は唐の東北辺に位置し、その北東にある契丹と併せ、唐から両蕃と呼ばれた。奚と契丹は唐初、突厥第一可汗国の勢力圏にあったが、第一可汗国の滅亡（六三〇年）の前後、唐に帰順し、奚には饒楽都督府が設置された。しかし、奚・契丹は距離の近さや歴史的な経緯から突厥の影響を受けやすく、契丹の李尽忠が反乱を起こした（六九六～六九七年）後、突厥第二可汗国の第二代・默啜に従属した。だが、默啜の勢力に陰りが見えると奚・契丹は再び唐に帰服した。⁵⁶⁾

唐は、これら動向が微妙な奚および契丹に対し、各々公主を降嫁させて懐柔した。特に奚に対しては、安史の乱以前の強盛な時期の唐から三人もの公主、固安公主（七一七年降嫁）、東光公主（七二三年降嫁）、宜芳公主（七四五年降嫁）が降嫁している。固安公主・東光公主が降嫁した外交上の理由は、奚が突厥に帰属しないよう阻止する事、奚を利用し突厥を牽制する事などが挙げられる。宜芳公主の降嫁は突厥滅亡後であり、奚王の李延寵が唐に帰順したので、唐は懐柔のため公主を李延寵に嫁がせたと思われる。⁵⁷⁾ なお、安史の乱勃発以降は、公主が奚に降嫁する事はなかった。

（2）ウイグルの支配下における奚と婚姻外交

奚・契丹は突厥第二可汗国の滅亡（七四四年）の後、その後継となるウイグルの勢力下に入った。『資治通鑑』

卷二四六・会昌二年（八四二）九月条には、「初、奚、契丹羈属回鶻、各有監使、歲督其貢賦。〔当初、奚と契丹はウイグルに支配され、ウイグルの派遣した監使によって、毎年、貢物や租税の献上を監督された。〕」とあり、正確な時期は不明であるが、奚は契丹と共にウイグルの支配を受け、可汗に対して貢物を納めていた。ウイグルが奚に派遣した「監使」を、『旧唐書』卷一八〇張仲武伝は「監護使」と記しており、日野開三郎氏はこれを「吐屯（tudun）」と解釈している。⁽⁵⁸⁾ また、『旧唐書』卷一九九契丹伝によれば、契丹はウイグルから、臣下として支配を認める印を授かり、これを用いていた。奚も、ウイグルから印を授かっていたかも知れない。

更に『新唐書』卷二一九奚伝によれば、奚は元和年間（八〇六～八二〇年）、ウイグルと連合し唐の振武軍を襲撃しており、ウイグルから出兵の義務も課されていたようである。

こうした主従関係の状況の下で、ウイグルは奚に対し王女を嫁がせた。その事は、唐国内の記録である『新唐書』卷二一二朱滔伝に簡単に記されているが、唐の周辺国の記録である『旧唐書』卷一九九奚伝や『新唐書』奚伝には記されていない。『新唐書』朱滔伝（次節で詳述）には、ウイグルが奚に王女を降嫁させた事、代宗時代の大暦末（七七九年頃）、奚が混乱して奚王が殺害されたため、王女が帰国を図った事などが記されている。

（３）ウイグルの奚に対する支配形態と西突厥による西域への支配体制との類似性

ウイグルから奚に王女を嫁がせた事は、突厥（及び西突厥）が西域諸国や堅昆（キルギス）に対し、可汗の娘を嫁がせて勢力圏に置いた事や、吐蕃が小勃律に王女を嫁がせて制圧下に置いた事とも、類似する支配形態であった。ウイグルもまた、属国の奚に王女を嫁がせ、強い勢力下に置いたと考えられる。

特にウイグルが奚に対して実施した諸政策、監督官の派遣、貢物献上の義務、婚姻関係の樹立という構図は、「西突厥による西域支配の形態」に酷似し、ウイグルが西突厥による属国支配の方法を継承したように思われる。なお、奚に降嫁していたウイグル王女は、大暦末（七七九年）頃、奚が混乱し、奚王が殺害された後、故国への

帰国を図ったが、このとき盧龍節度使の朱滔に迎えられて妻となる。次節では、朱滔と婚姻を結んだウイグルの動向に焦点を当てる。

(三) 反側藩鎮・朱滔へのウイグル王女の降嫁（大暦末〔七七九年頃〕～七八三年頃）

『新唐書』卷二二朱滔伝には、「初、回紇以女妻奚王、大暦末、奚乱、殺王、女逃歸、道平盧、滔以錦繡張道、待其至、請為婚、女悅、許焉。既而遣使修壻礼於回紇、回紇喜、報以名馬重宝。及僭相王：乞師焉。回紇以二千騎從。〔はじめウイグルは王女を奚の王に嫁がせていたが、大暦の末（七七九年頃）、奚が乱れ、奚王が殺害された。

王女はウイグルに逃げ帰ろうと、平盧軍の営州（遼寧省朝陽）を通過した。このとき朱滔は錦と刺繡を施した織物を道に敷いて王女の到来を待ち、求婚した。王女は悦び、朱滔に結婚を許した。その後、朱滔が婿の礼を取ってウイグルに修好のための使者を派遣すると、ウイグルは喜び、返礼として朱滔に名馬と宝物を贈った。朱滔が王を僭称するに及び：ウイグルに援軍を乞うと、ウイグルは二千の騎兵を派遣し朱滔に従った。〕」、「資治通鑑』卷二二八・建中四年（七八三）十月条には、「（朱）滔娶回紇女為側室、回紇謂之朱郎〔朱滔はウイグルの女を娶って側室としたので、ウイグルは、朱滔のことを親しみを込めて朱郎と呼んだ〕」とある。

上記の史料により、大暦末（七七九年頃）、朱滔が奚から亡命してきたウイグル王女を側室となした事、朱滔が反乱を起こして王を僭称した時、ウイグルが王女の降嫁も機縁として朱滔に援軍（騎兵二千）を派遣した事、などが分かる。

なお、朱滔とウイグルが通婚した前後の時期にあたる建中元年（七八〇）八月、唐の振武軍使・張光晟がウイグルの使者を殺害し、駱駝・馬・絹錦などを没収した。殺害された使者の中には、第四代・天親可汗（在位七七九～七八九年）の叔父・突董も含まれていた。このため、徳宗はウイグルに使者を派遣して可汗に謝罪し、絹十万匹・金銀十万兩を賠償金として支払った。⁽³⁹⁾この唐によるウイグル使節殺害事件は、天親可汗を怒らせ、可汗が朱滔

に援軍を派遣する一因になったかも知れない。

興元元年（七八四）五月、朱滔は唐軍に敗北し、ウイグルの援軍も敗走した。その後、朱滔が病死し、ウイグルもこれ以降、反側藩鎮と連繫する事はなかった。

（四）対吐蕃のためのウイグルと唐の連繫、真公主の降嫁（七八〇年代～八二〇年代）

唐は、貞元三年（七八七）閏五月、平涼偽盟で吐蕃に欺かれたため、吐蕃と決定的に対立するようになった。このとき宰相の李泌が、ウイグル・南詔・大食と連繫し吐蕃包囲網を構築するよう進言したので、徳宗はウイグルとの和睦を決断した。一方、ウイグルもこの頃、吐蕃との間で北庭の帰属を巡って対立していた。そこで、対吐蕃という共通の目的で唐とウイグルは連繫し、貞元四年（七八八）、徳宗の娘・咸安公主が天親可汗に降嫁し、親善を強化した。その後も唐とウイグルは対吐蕃で連繫し、長慶元年（八二一）、穆宗が妹の太和公主を第十代・崇徳可汗（在位八二一～八二四年）に降嫁させた。

第四章 六世紀中葉から八世紀の東部ユーラシアの国際情勢と婚姻関係

本章では、六世紀中葉～八世紀、東部ユーラシアに展開された婚姻ネットワークの推移と、その时期的な特徴を見ていく。この時期の東部ユーラシア諸国の婚姻関係については、【図】（図1～図8）にも俯瞰したので、図も参照しながら読み進めて頂きたい。

（一）六世紀中葉～七世紀前半の突厥と周辺国家の婚姻外交（図1・図2・図3・図4）

突厥は、西魏の廢帝元年（五五二）、柔然の服属下から独立し、モンゴル高原に政權を樹立したが、通婚も介した西魏との通好、華北における西魏と東魏の対立も、突厥の興隆に大いに利した。その後も、華北の覇權を巡って対立する北斉と北周が、互いに相手を凌駕しようと、突厥に贈物を献上し通婚を請願したので、突厥は両者の抗争

も利用しつつ勢力を拡大し、北周と連合して北斉を攻め、天和三年（五六八）、北周と婚姻を結んだ。

突厥および西突厥は、隋代から唐初にかけて、西域諸国（高昌・焉耆・疏勒・龜茲・于闐・康国）との間で盛んに通婚し、東西交易の要衝である西域を支配下に置いた。

なお、高昌などの従属国にとっても、突厥や西突厥と婚姻を結ぶ事で強国の後ろ盾を獲得でき、対外的には隣国からの侵攻を阻止し、対内的にも自己の支配を強化できるという利点があったと思われる。

（二）七世紀…吐蕃と周辺諸国との婚姻（図5）

七世紀、突厥に代わり東部ユーラシアで活発に婚姻外交を展開したのは、チベット高原の新興国・吐蕃であった。吐蕃は勃興期と興隆期に、勢力の安定化と拡張のため、積極的に周辺諸国との間で婚姻も通じた友好関係の構築を図った。

なお、吐蕃は羊同との間で二重の婚姻関係を結んでいたが、羊同に降嫁した吐蕃王女が冷遇された事を口実に、六四三年頃、吐蕃は羊同を討滅した。また、吐蕃は滅ぼした吐谷渾に王を擁立し、六八九年、吐蕃王女を降嫁させて結びつきを強め、後には王女の子を吐谷渾の可汗に擁立した。

このように、吐蕃は、婚姻外交を自己の勢力圏の拡大と支配の強化の契機としても積極的に活用している。このことは次節で述べるように、唐との婚姻でも見られ、公主の「化粧料」という名目で唐の領土を奪取している。

（三）八世紀前半…東部ユーラシア諸国の多彩な婚姻外交（図6）

この時期、北方に突厥が再興し、東部ユーラシア世界では、非対称ながら唐・突厥・吐蕃の三国が鼎立した。

唐・突厥・吐蕃を中心とした国際情勢は複雑となり、そうした国際関係も反映して、当時の国家同士の婚姻関係も多彩であった。それを示す象徴的な事例は、突騎施の蘇祿が唐・突厥・吐蕃の三大国から各々可敦を迎えていた事であろう。

八世紀前半の唐・突騎施・突厥・吐蕃などの通婚の状況をまとめたのが【図6】と【系図】である。これから、実に国際色豊かな国家間の婚姻関係が窺えると同時に、周辺国同士が、対唐のため、婚姻も通じて連繫した事も見取れる。本節では、当該時期の唐を含めた諸国間の通婚状況を、多様な国際情勢と関連させつつ見ていきたいと思うが、八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を巡る国際情勢については前稿⁶⁰で論考したので、ここでは当時の婚姻状況を絡めつつ要点のみを述べる事にする。

七世紀後半、唐と吐蕃が西域の覇権を巡って対立した。また、永淳元年（六八二）、突厥（第二可汗国）が再興し、唐は北方にも脅威を抱えるようになった。しかし、吐蕃では長安四年（七〇四）、王のチ・ドゥーソンが南方遠征で戦没し、後継者のチデツクツェンも幼く政権が不安定であったため、唐に対し公主降嫁を請願した。唐は吐蕃と会盟（神龍会盟）を締結して和睦し、景龍四年（七一〇）、金城公主をチデツクツェンに降嫁させた。だが、吐蕃は金城公主の化粧料として河西九曲を唐より奪うと、同地を前進基地となして攻撃を再開した。吐蕃は開元五年（七一一）、突騎施の蘇祿と連合し、安西（撥換城）を攻撃した。このため玄宗は、開元七年（七一九）、蘇祿を忠順可汗に冊立し、開元十年（七二二）には交河公主を蘇祿に降嫁させ、懷柔を試みた。また唐は、北方に再興した突厥第二可汗国を牽制するため、突厥の勢力下から離反した契丹と奚に対し、各々公主を降嫁させた。

このように唐は吐蕃・突騎施・契丹・奚に公主を降嫁させたが、吐蕃との間では交戦が再開し、突騎施も開元十五年（七二七）、吐蕃と連合して安西城を襲撃し、契丹は開元十八年（七三〇）～開元二十一年（七三三）、突厥や渤海とも連合しつつ唐と対立した。これに対し、唐は吐蕃と会盟（開元会盟）を締結して停戦し、新羅に対して渤海討伐を命じ、北方連合（突厥・契丹・奚・渤海）との戦いに専念した。更に、唐は北方連合の中心となる強国・突厥に対して融和策を仕掛け、開元二十二年（七三四）、それまで許さなかった毗伽可汗への公主降嫁を許可し、突厥の懷柔を図った。

しかし、唐が北方連合への対策に迫られている隙に、西方では、開元二十二年（七三四）、吐蕃が突騎施の蘇祿に王女を嫁がせた。この翌年の開元二十三年（七三五）、突騎施が北庭と安西を襲撃するが、蘇祿は吐蕃と婚姻も通して連合を強化した事で勢いづき、攻勢に出たと思われる。吐蕃も開元二十五年（七三七）、小勃律を攻撃した。これに対し、唐も開元二十六年（七三八）、河西・隴右・劍南から吐蕃に反撃し、唐・吐蕃間で戦争が再開した。吐蕃は開元二十八年（七四〇）、王女を小勃律の王に嫁がせて同地を掌握し、西北の二十餘国も支配下に組み入れた。

ここで、八世紀前半における東部ユーラシアの国際関係を婚姻という指標で総括する。この当時、北方の突厥、西方の吐蕃が強大な勢力を有したので、唐は二正面作戦を回避するため、公主降嫁による婚姻外交も駆使し、北方情勢と西方情勢への対応を試みた。唐は、吐蕃・突騎施・契丹・奚などの周辺諸国に盛んに公主を降嫁させ、吐蕃および突騎施との和睦や、契丹・奚を利用した突厥の牽制を画策したと考えられる。一方、吐蕃と突騎施も婚姻を介した軍事同盟を締結し、唐に対抗した。八世紀前半の東部ユーラシアにおける国際関係の多彩さは、当時の諸国間の婚姻関係の複雑さ多様さからも見て取れよう。

（四）八世紀後半…安史の乱後、ウイグルを中心とした婚姻関係（図7）

安史の乱が勃発すると、唐は援軍を派遣したウイグルに対し、毎年絹二万匹を下賜し、肅宗の娘（寧国公主）を降嫁させるなどの優遇策で臨んだ。

ウイグルは、勢力圏にある奚に対し、王女を嫁がせていた。この王女は奚王が殺害された後、盧龍節度使の朱滔に迎えられ、側室となった。この婚姻も機縁となってウイグルと朱滔は親善を深め、建中四年（七八三）、朱滔が反乱を起こした際、ウイグルは援軍を派遣し、朱滔の軍勢と共に河北を略奪した。実はこの当時、ウイグルは唐に使節を殺害され、唐への怒りを募らせていたので、報復のためもあり、反乱勢力に加勢したと思われる。しかし、

唐とウイグルは貞元四年（七八八）、吐蕃に対抗するため和睦し、徳宗の娘（咸安公主）が降嫁して連繫した。

隋唐時代、突厥・吐蕃などの強国に公主が降嫁したが、いずれも宗室の女性（仮制公主）であった。しかし、ウイグルに対しては三人もの真公主（皇帝の実の娘）が降嫁した。安史の乱後、相次ぐ内憂外患に呻吟した唐にとって、ウイグルの助力は不可欠であり、北方強国の可汗との婚姻を重視した事が見て取れる。

安史の乱後の婚姻外交で特筆すべき点は、ウイグルが主導権を握るようになった事、ウイグルと唐国内の藩鎮との間で婚姻が結ばれた事であろう。北方遊牧政権が、中華王朝以外の中華内勢力と通婚し、派兵して支援した事は、中華史上でも稀有な事象である。

おわりに

最後に本稿での考察をまとめ、論考を締め括りたいと思う。

本稿で扱った六世紀中葉から八世紀の東部ユーラシアでは、中華王朝のみならず、北方・西方の強国も、それぞれ周辺諸国や属国に対して積極的に婚姻政策を行っており、そのことは婚姻が概ね国家同士の間の友好関係の強化や属国への支配強化に有用であったことを如実に物語っている。また、弱小国や属国の方も、強国との婚姻関係により強国の後ろ盾が得られ、隣国からの侵略を防ぎ、その地の支配を強化するという利点もあったであろう。

和親の典型的な例として隋および唐が周辺諸国に降嫁させた和蕃公主が挙げられるが、本稿でも見たように、周辺国同士の婚姻も多くあり、突厥と突騎施との婚姻、吐蕃と突騎施との婚姻などは、親善関係の維持・強化を目的としてなされた。

婚姻は、属国や占領地の支配強化の手段としても多く活用された。例えば、突厥・吐蕃・ウイグルは、それぞれ従属する近隣諸国に娘を嫁がせるなどして婚姻関係を結んでおり、西突厥は西域諸国（高昌・焉耆・龜茲・于闐・

疏勒、康国）、吐蕃は党項、ウイグルは奚との間で各々通婚し、婚姻も梃子として支配力の強化・浸透を図ったように見受けられる。

特に、西突厥と通婚していた高昌・焉耆・龜茲・于闐・疏勒は、いずれも唐軍による討滅後、唐の西域支配のための軍事拠点（安西都護府、及び安西四鎮）と化しており、西突厥が、これら西域の軍事上・経済上の重要拠点に対し、婚姻政策も含めた支配体制の強化を試みていたと思われる。つまり、西突厥は西域諸国に監督官を派遣し、貢物を献上させ、従属を強いる反面、諸王と婚姻を結んで友好関係を築き、飴と鞭のやり方で支配に臨んだ。なお、ウイグルは奚に対し、やはり監督官を派遣し貢物の献上を義務づけ、同時に奚王と通婚したが、これは西突厥の支配形態を見倣ったとも考えられる。

また、吐蕃は、軍事占領した要地、吐谷渾と小勃律に対して王女を降嫁させたが、吐谷渾では吐蕃王女の息子を傀儡君主に擁立し、小勃律では吐蕃派の大臣に国政を担わせるなどして、強い占領支配を行った。

ただし、国家間の婚姻関係が必ずしも連繫の強化や和平の維持に決定的とは限らなかった。例えば、唐から吐蕃への金城公主の降嫁の際には、持参金としての領地割譲を巡り、かえって戦争の契機にすらなった。また、吐蕃から羊同への王女降嫁の場合、王女が羊同で冷遇された事が吐蕃の怒りを買い、羊同は吐蕃によって滅ぼされた。

別の例としては、唐と吐谷渾王族との「三重の婚姻関係」による親善強化も、唐からの軍事的支援を伴わなかった結果、吐蕃の軍事力による吐谷渾掌握を許してしまった。また、西突厥の有力者（可汗の息子や重臣の弟）と通婚していた高昌や焉耆は、唐の対外膨張に抵抗するため、西突厥の庇護下に入り、助力を求めたが、その結果、唐の警戒心を掻き立て討滅された。これらは、強国との婚姻関係が、別の強国相手には必ずしも後ろ盾にはならなかった例である。

周辺諸国同士の婚姻には、中華王朝に対抗するための連合という意味を持つ事例も見られる。例えば、吐蕃と突

騎施は通婚する前から幾度か連合して唐の安西都護府などを攻撃しており、婚姻を結んで、対唐のための軍事同盟を強化したと考えられる。実際、吐蕃と突騎施が通婚すると、唐はこれを警戒し、吐蕃に勅書を送って警告や非難を発している。周辺諸国同士の婚姻同盟には、中華王朝を牽制する効力もあった。

一方、中華王朝も、突厥などの強国とその近隣諸国との連繫を切り崩すために、公主を降嫁させる事もあった。

例えば、隋は、突厥もしくは西突厥と通婚していた高昌や吐谷渾に対し、公主を降嫁させて、突厥および西突厥が高昌・吐谷渾と連繫するのを阻止した⁽⁶⁾。

このように、隋唐期の東部ユーラシア世界では婚姻関係は、重要な外交的手段として概ね機能していた。特に安史の乱以前の唐代では、非対称ながら唐・突厥・吐蕃の三大勢力の鼎立という流動的な国際情勢を反映し、婚姻外交の様相も動的で多彩であった。一方、安史の乱後は、北方の強国ウイグルと西方の強国吐蕃の動向がより重要となり、唐は内乱と外圧に苦闘するようになる。こういった国際情勢の変化は婚姻外交にも如実に反映され、例えば、唐はウイグルに対し、初めて真公主（皇帝の実の娘）を降嫁させ、殊遇によって懷柔を図っている。また、唐の国内勢力の分裂的傾向という新たな要素も加わり、例えば、ウイグルは唐国内の藩鎮・朱滔とも通婚し、その反乱の際には援軍を派遣して唐を攻撃するなど、婚姻外交の形態も、より複雑化・混沌化していった。

六世紀中葉から八世紀に至る東部ユーラシア世界では、中華王朝に加えて突厥・吐蕃・ウイグルといった強国が、近隣諸国との間で積極的に婚姻外交を展開しつつ勢力の保持や対外膨張策を推し進めていた。隋唐時代、中華王朝から周辺諸国に対し和蕃公主が盛んに降嫁した背景にも、これら周辺強国の婚姻外交への対抗という側面もあったと考えられる。また、全体的な構図としては、【図8】でも示したように中華帝国、北方・西方の強国と共に、それら強国の内部や周辺には多くの小国や小勢力が存在し、ある種の階層的構造を有していた。そして、強国側から見れば、それら周辺小国を支配下に取り込む有効な手段として、小国側から見れば、強国と結び勢力を維持・拡張

する手段として、婚姻関係は重要な外交的要素の一つであったと思われる。そして、そういった諸国間の繋がりは、広域的な視点からは【図】で明示したように、東部ユーラシア全体としての連動性にも繋がっており、この時期の東部ユーラシアが一つの世界圏を形成していた事が見て取れる。

本稿の発展として東部ユーラシア諸国の婚姻状況を詳細に調べ、その全体像を把握することは、戦争や同盟・臣従関係の把握などと共に、当時の勢力図や流動的な国際関係の様相を包括的に理解する上でも重要な要素と考えられる。今後こういった様々な観点を取り込んだ全体的・総合的な方向での東部ユーラシア史の研究が進展していくことを期待する。

註

- (1) 日野開三郎「唐代の和蕃公主」(『東洋史学論集』第九卷、三一書房、一九八四年三月、初出は一九七八年)、藤野月子「唐代の和蕃公主をめぐる諸問題について」(『九州大学東洋史論集』第三四号、二〇〇六年四月)、藤野月子「王昭君から文成公主へー中国古代の国際結婚」(九州大学出版会、二〇一二年三月)、拙稿「和蕃公主を通じての唐の外交戦略」(『総合女性史研究』第三一号、二〇一四年三月)など。
- (2) 林冠群「唐代吐蕃對外聯姻之研究」(『唐代吐蕃歴史与文化論集』中国蔵学出版社、二〇〇七年十月、初出は二〇〇二年)二二頁。
- (3) 『新唐書』卷二二五下突厥伝下に「蘇祿…帝以阿史那懷道女為交河公主妻之…又交通吐蕃、突厥、二国皆以女妻之、遂立三国女並為可敦」とある。
- (4) 『漢書』卷九六下西域伝下烏孫伝。拙稿「烏孫への和蕃公主の外交活動と漢の対外政策」(『総合女性史研究』第三四号、二〇一七年三月)も参照。
- (5) 小野川秀美「突厥碑文訳註」(『滿蒙史論叢』第四卷、日滿文化協会、一九四三年)、Talat Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*, Indiana University, 1968.
- (6) 王堯・陳踐訳註『敦煌本吐蕃歴史文書(増訂本)』(民族出版社、一九九二年二月)、黄布凡・馬徳「敦煌蔵文吐蕃史文献訳註」(甘肅教育出版社、二〇〇〇年六月)。
- (7) 黄顯・周潤年訳註『賢者喜宴—吐蕃史訳註』(中央民族大学出版社、二〇一〇年八月)。
- (8) 拙稿「西魏・北周の对外政策と中国再統一へのプロセス」(『史窓』第七〇号、二〇一三年二月)、前掲註(1)拙稿「二〇一四」、拙稿「隋代の和蕃公主と北方・西方に対する隋の外交戦略」(『立命館東洋史學』第三八号、

二〇一五年八月。

- (9) 前掲註(8)拙稿「二〇一三」。
- (10) 『周書』卷五〇突厥伝。前掲註(8)拙稿「二〇一三」。
- (11) 『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一六九、卷一七〇。前掲註(8)拙稿「二〇一三」。
- (12) 『隋書』卷八四突厥伝。前掲註(8)拙稿「二〇一五」などを参照。
- (13) 前掲註(8)拙稿「二〇一五」。
- (14) 『旧唐書』卷一九四突厥伝、『新唐書』卷二一五突厥伝。
- (15) 小谷仲男・菅沼愛語『新唐書』西域伝訳注(一) (二) (京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編) 第九号(第一〇号、二〇一〇年) 二〇一一年、『隋書』西域伝、『周書』異域伝(下)の訳注(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第十一号、二〇一二年) 参照。
- (16) 岑仲勉『西突厥史料補闕及考證』(中華書局、一九五八年) 四頁、九頁、三一頁、五二頁、余太山主編『西域通史』(中州古籍出版社、一九九六年) 一二九〜一三〇頁。
- (17) 嶋崎昌『隋唐時代の東トルキスタン研究—高昌国史研究を中心として』(東京大学出版会、一九七七年三月) 五七一頁、内藤みどり『西突厥史の研究』(早稲田大学出版部、一九八八年) 一三二頁も参照。
- (18) 麴寶茂、麴乾固については、大谷勝眞「高昌麴氏王朝考」(『京城帝国大学文学会論纂』第五輯、史学篇、一九三六年)、前掲註(17)嶋崎昌「一九七七」参照。
- (19) 前掲註(18)大谷勝眞「一九三六」、前掲註(17)嶋崎昌「一九七七」。
- (20) 突厥では父兄の死後、後継者が継母や嫂を娶った。『周書』突厥伝。
- (21) 『隋書』卷四煬帝紀、『旧唐書』卷一九八高昌伝、前掲註(8)拙稿「二〇一五」。
- (22) 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷二。慧立・彦惊著、長澤和俊訳『玄奘三蔵』(講談社、一九九八年六月) 七六頁。
- (23) 『周書』突厥伝に「突厥：姓阿史那氏」とある。
- (24) 寺本婉雅『于闐国史』(丁子屋書店、一九二一年) 四五頁。
- (25) 前掲註(8)拙稿「二〇一五」五六頁。
- (26) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝下、『資治通鑑』卷二二一、卷二二二、卷二二三。蘇祿と大食の対戦については、前嶋信次「タラス戦考」(『民族・戦争—東西文化交流の諸相』誠文堂新光社、一九八二年九月) 七六〜七九頁を参照。なお、藤野月子氏は、イスラム勢力と対立する蘇祿は、交河公主を通じ唐との連繫強化を試みたと考察する。藤野月子「唐と突騎施との和蕃公主」(『七限史学』第一七号、二〇一五年三月)。
- (27) 拙稿「八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢」(『史窓』第六七号、二〇一〇年二月)、拙著『七世紀後半から八世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に』(『溪水社』二〇一三年十二月) 第2章などを参照。

- (28) 前掲註(5) 小野川秀美「一九四三」二八五～二八六頁、
Talar Tekin 1968, P230. 森安孝夫「吐蕃の中央アジア
進出」(『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出
版会、二〇一五年二月、初出は一九八四年)二一五頁註
一八三も参照。
- (29) 佐藤長『古代チベット史研究』上下巻(同朋舎、一九
七七年七月、初版は一九五八年～一九五九年)七三五
～七三六頁。
- (30) 前掲註(2) 林冠群「二〇〇七」。
- (31) 『旧唐書』卷一九六吐蕃伝、『新唐書』卷二一六吐蕃伝。
山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』(岩波書店、一九八三
年二月、前掲註(29) 佐藤長「一九七七」、前掲註(1) 藤
野月子「二〇一二」、前掲註(1) 拙稿「二〇一四」、黒田
舞子「文成公主、金城公主からみる唐・チベット関係」
(『東アジア文化交渉研究』第一〇号、二〇一七年三月)
など参照。
- (32) 前掲註(27) 拙著「二〇一三」第2章、前掲註(1) 拙稿
「二〇一四」。
- (33) 前掲註(29) 佐藤長「一九七七」二四五～二四六頁、前
掲註(2) 林冠群「二〇〇七」。
- (34) 前掲註(29) 佐藤長「一九七七」二四五～二四六頁、前
掲註(6) 王堯「一九九二」一六七～一六九頁、前掲註
(6) 黄布凡「二〇〇〇」二三〇～二三四頁、前掲註(2)
林冠群「二〇〇七」二二五～二二七頁。
- (35) 前掲註(7) 黄顥「二〇一〇」六三頁。
- (36) 前掲註(7) 黄顥「二〇一〇」五四～五八頁、前掲註
- (29) 佐藤長「一九七七」七三五頁。
- (37) 前掲註(29) 佐藤長「一九七七」五五～五八頁、二七一
頁、ロラン・デエ著・今枝由郎訳「チベット史」(春秋
社、二〇〇五年十月)四〇頁。
- (38) 前掲註(31) 山口瑞鳳「一九八三」三一六頁、三二一頁、
前掲註(29) 佐藤長「一九七七」八一五頁註十四、前掲註
(2) 林冠群「二〇〇七」二一九頁、旗手瞳「吐蕃による
吐谷渾支配とガル氏」(『史学雑誌』第一二三編第一号、
二〇一四年一月)六一頁註四五。
- (39) 『旧唐書』卷一九八吐谷渾伝、『新唐書』卷二二一吐谷
渾伝、『冊府元龜』卷九六四。前掲註(27) 拙著「二〇一
三」第一章、前掲註(1) 拙稿「二〇一四」も参照。
- (40) 前掲註(38) 旗手瞳「二〇一四」四四頁、四六頁。
- (41) 前掲註(29) 佐藤長「一九七七」七三五頁、八一五頁註
十五、前掲註(6) 王堯「一九九二」一四八頁、前掲註
(6) 黄布凡「二〇〇〇」四三頁、前掲註(38) 旗手瞳「二
〇一四」四四頁。
- (42) 前掲註(38) 旗手瞳「二〇一四」四四頁、四六頁、五二
頁。
- (43) 前掲註(29) 佐藤長「一九七七」三五一頁、前掲註(28)
森安孝夫「二〇一五」一五〇頁、菅沼愛語・菅沼秀夫
「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国
の自立への動き」(『史窓』第六六号、二〇〇九年二月)
十一頁などを参照。
- (44) 『資治通鑑』卷二〇四。(43) も参照。
- (45) 前掲註(38) 旗手瞳「二〇一四」。

- (46) 前掲註(6)王堯「一九九二」一五三頁、一八四頁注五〇、前掲註(6)黃布凡「二〇〇〇」五二頁。前掲註(29)佐藤長「一九七七」四七〇頁、七三六頁、前掲註(28)森安孝夫「二〇一五」一七四〜一七五頁。
- (47) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝下、『資治通鑑』卷二二一、卷二二三。
- (48) 開元二十三年〜開元二十四年の蘇祿と唐軍の対戦については、『資治通鑑』卷二二四、蘇祿と大食の対戦については前掲註(26)前嶋信次「一九八二」七八〜七九頁。
- (49) 前掲註(29)佐藤長「一九七七」四七一頁、前掲註(28)森安孝夫「二〇一五」一七七頁。
- (50) 張九齡撰・熊飛校注『張九齡集校注』(中冊、中華書局、二〇〇八年)六五五頁、六六四〜六六六頁。石見清裕「唐・張九齡『曲江集』所収の対吐蕃国書四首について」(『シルクロードと近代日本の邂逅』勉誠出版、二〇一六年)も参照。
- (51) 前掲註(6)王堯「一九九二」一五三頁、一八四頁注五一、前掲註(6)黃布凡「二〇〇〇」五三頁、前掲註(28)森安孝夫「二〇一五」一七七頁。
- (52) 吐蕃の小勃律攻撃の時期は、前掲註(28)森安孝夫「二〇一五」一七七頁参照。
- (53) 林俊雄「ウイグルの対唐政策」(『創価大学人文論集』第四号、一九九二年三月)一一七頁、新見まどか「唐代河北藩鎮に対する公主降嫁とウイグル」(『待兼山論叢』
- 史学篇、第四七号、二〇一三年十二月)四一〜四三頁、前掲註(27)拙著「二〇一三」第7章、拙稿「九世紀前半の東部ユーラシア情勢と唐の内治のための外交」(『史窓』第七三号、二〇一六年二月)五頁、拙稿「前漢・新・後漢・隋唐期の中華と周辺諸国双方における敵国内勢力との外交交渉」(『九州大学東洋史論集』第四五号、二〇一八年三月)一八頁などを参照。
- (54) 前掲註(27)拙著「二〇一三」、前掲註(1)拙稿「二〇一四」、前掲註(53)拙稿「二〇一六」。
- (55) 『旧唐書』卷一九五迴紇伝、『新唐書』卷二七回鶻伝、『資治通鑑』卷二一九。前掲註(1)藤野月子「二〇一二」一二頁、三四頁も参照。
- (56) 『旧唐書』卷一九九奚伝、契丹伝、『新唐書』卷二一九奚伝、契丹伝。
- (57) 奚への公主降嫁とその背景については、前掲註(1)拙稿「二〇一四」参照。
- (58) 前掲註(1)日野開三郎「一九八四」二九五頁。
- (59) 『旧唐書』卷一二七源休伝、『新唐書』回鶻伝、『資治通鑑』卷二二六。前掲註(53)林俊雄「一九九二」一二六頁参照。
- (60) 前掲註(27)拙稿「二〇一〇」、前掲註(27)拙著「二〇一三」第2章。
- (61) 前掲註(8)拙稿「二〇一五」五六頁、六五頁参照。